身体：さいごのとりで

国際教養学部教授　栂　正行

教養テーマゼミや国際教養学部の一年生の英語の授業、また講義科目として異文化研究、兼担科目として「博物館と英語」という気取りを極力取り払った科目を続けてきた。本稿は『教養教育研究』への投稿なので、全学共通科目に限って話をするのが厳密に言えば筋だが、ひとりの教員がひとつの教室を出ると全学共通科目的な顔から学部固有科目的、専門科目的な顔になるというようには人間できていないので、境界を意識せずに話を進める。上記の担当科目だが、今後、企業の在宅化にともない、また教室の節電や大教室クラスのネット聴講の加速化にともない、軸足の置き方が変わってくることになるかもしれない。

たとえば異文化研究。この科目は自学内においてはそれぞれの教員がそれぞれの個性で教えている。しかし、さらにたとえば特化してヴェトナム文学という科目をたてようとすると、専門家が少ないので、専門家による講義をスタジオで収録し、それを配信するということがおこりうる。それに引っ張られ、イギリス文学なども、シェイクスピア一人、王政復古期一人、十八世紀散文一人、詩一人、十九世紀散文一人、詩一人、二十世紀散文一人、詩一人、二十一世紀…という具合に、それぞれの全国の第一人者の講義を収録し、各大学が選択をするということもおこりうる。ただし、一本化すると危険もでるので、同じ時代でも複数の講義が出回ることが望ましい。すると大学ごとのカリキュラム作成作業はいわば編集作業のようなものになり、地域や学力に応じ、また大学それぞれの将来像に応じ、変化をつけていくことになる。編集作業に必要な講義という材料は、どこも基本的に同じになるので、別の工夫に力を注がなければならない。

そこで思い起こすのがいささか美化のしすぎを覚悟で言えば、初期の大学の姿だ。ある学者がいて、どこそこの僧院の一角で話をするという。すると各地から人が集まり、講義を聴き、聴講料として志をおいていく。グーテンベルク以降、書物の印刷が活発になっても、本だけではわからないから著者の話を聴く。大学者は思索に忙しく本など書かないから弟子がノートを集めて本にする。仏陀からソシュールまでそうやって後世の人々はかれらの片鱗にふれた。しかし、それはあくまでも片鱗。書物が片鱗である以上にネットでは片鱗の度合いが高まる。書物でも著者を知っている本は理解が深まり、知らない場合は理解に限度もある。書いてあることの意味はわかるが、それがその著者の生き方としっくりいっているか、その奥にまだ何かあるのではないかということまではわかりにくい。ましてネットの講義となると、微妙なニュアンスはよほど熟達した学生でないと読み取れない。法律の条文のようにバグやリダンダンシーを極力排した文章でさえ、複数の解釈がなりたちかねない。

そこでネット講義時代に重要になるのは、小さなクラスでの教員の肉声となろう。まず知識を提供するという段階ではネット講義が威力を発揮するかもしれない。大学事務局はいろいろな課金のしくみを考えるのであろう。しかしネット講義のあと、それに肉付けす

るメタ講義、メタ小人数クラス、メタゼミのようなものが必要となることは確かだ。教員と学生のより顔の見える関係が大事になる。若い教員の活躍する場面も年配の教員の活躍する場面もあろうから、ネット講義で人員が減ってもメタ系の科目は増やす必要がでて、結果として教員の数に著しい変化はおきないと考えるのは楽観的に過ぎるとしても、AIのできないことを探す時代に教員も直面している。

ひとつ心強いのは、スポーツ科学部の体育の教員志望の学生たちのことばのひとつ。AIについてどう思うという質問に、「私たちは身体を動かして教育しますので、仕事はなくなりません」というこたえが即座に帰って来た。振りかえればのことながら、小学校、中学校、高校と、からりとした体育の先生たちと日本の外の世界を見せてくれた英語の先生たちが、困ったときに相談にのってくれたことを思いだした。